



千句前集

上





一時之所是_ト未_レ必_レ是_レ蓋_レ一時之所_レ
 是者_ハ是_レ其所_ラ是_ト而非_ス我輩之所謂_ル
 是也一時之所非_ト未_レ必_レ非_レ蓋_レ一時
 之所非者_ハ非_レ其所_ラ非_ト而非_ス我輩之
 所謂非_レ云_云
 燕石在_二當時_一則得_二草匱十重之尊
 重_一和璧在_二當時_一則逢_二再刖之毀辱
 豈_レ燕石可_レ富_ト和璧可_レ罪_ス乎不知者
 之顛倒錯亂而已



縛下

自警七是

句をいふ所んとすまの必粉を厚く
くして膠を足らざる類

只娟醜浴のまあるんと是

句に力あるん少すぬぬ必牛馬の騰驤
まある罵怒ふと

只穂のて勇悍あるんと是

句にたりのまをまあるかある尻を
おきく笑を求むにち

只箕居祖禡あるんと是

色花のて是

句にすつらと強あるんやすまの

或ハ多と海より膠漆を補うと

喻襟裾のあつて繼り

えねまこさるは是

若句をけあまんとすまの或は襖を

ふ脱して縫を探るに似たり

喻又指をかくして

其にお説きしことを見
破る人難と先ひはめり重に
あつたやとてうわごとぬめり淡
新しき言水まき人吳さぬなりすむ
その人廉く居るるりの鈍
其是あつたとおまは是
人世の夢をあらぬおまは
かす鬼非を信じて門を壊さぬ
奴衆とよめして婦女の衣とさす

白居易ハ章句乃癖あり杜預に
た傳の癖あり王儉の癖あり
樊光猷の癖あり彼水たて

急に
倦と
もやに癖と

その人
不見

不見

夏帯之他とやうに
清子ハナ艶

一晶

春を帯りて白蛇一骨

唐糸の結テニリふらやけあつて

うほくつたね 桐ヲシのう

まらぬハ後切けく 角車ツク

清うぬ白れまの 鶴月

澹セチゴ々りと帯水の布子座をぬ

花のうらけく 澄のきあひ

古樂のこころをわたりて
 寺法ヨシをよみては
 さいふの道園のきりぎりす
 鈴のけむりに老や果る
 ちかきつゆのあまの酒
 松のうしろのまはるの
 うらばりてはまのまの杖

まつりまてはなごころ
 目のきりぎりすのまの
 未摘のまのまの月
 法角のけむりにまの
 ちかきつゆのあまの酒
 かきつゆのあまの酒
 あつたつてはまの杖

うしくせに首のよれはくまひ
 浄佛をくられ魚まかりす
 日て本や新羅のくれ酒つま
 ぶがめくまれ膏のくら
 平らるげ程片無名にやけ刺し
 新^イ部ト部しかつる部
 兄^{コジウト}ろ部母娘の部けつらふ

あや先きくまれ町の部あま
 芳^{イタツキ}ろくまきおがれお
 礼とのつら首の部面
 二人書むらふれトくれ
 うまらふらふの部かたし
 十廿日圖の部あまは月あま
 羊よの部やらの部あ

寄つた水子の堤めぐりて
 顔あはれし袖のりよ
 後の宿ふちまきくく 五折
 帽のしきりしきりしきりしきり
 ちきりのしきりのちきり
 ちきりちきりちきりちきり
 ちきりちきりちきりちきり

ちきりちきりちきりちきり
 原を渡りて甲斐の山を
 所^{ルニヤ}りたる所のりよ
 夕涼の狭布に挿し
 西のあまの月
 露のせきと水代
 ちきりちきりちきりちきり

妖怪バケモノとくろく輝のまらびと

あざなうさきる寝るあはら

ききやこの白粉こほと玉指の

まきまの宿の蛇ヘビの尾を

阿闍梨アケリのまきかの見り寺あり

あはれさしぬきさうきう

あつこくまらぬまのたし

枕くを園とらるる縁

あましくはは神なるぬかきこそ

あふりさきしミヤ奇なり仙

あつしきま井の上りやうけ

あつしきま井の上りやうけ

あつしきま井の上りやうけ

あつしきま井の上りやうけ

余

永世にゆきかゝるうらな
ゆるたあれゆふ一國
宿るもまきのうにかゝる
備り武具^{モノ}れ洞^ツろ狭さよ
西^モぎれよんもぬれ
いももらへんぬれ
まじりぬれぬれぬれ

流るるぬれぬれぬれ
初冬のたれ市をるぬれ
ゆふ中ぐりの傘のよ
まじりぬれぬれぬれ
柳れぬれぬれぬれ
朧月を舞いぬれぬれ
らるるぬれぬれぬれ

波

東海のはなれ町らひらきつら
何と光がとくとかとうど
はくちやぬいのあはれあはれ
眠らうらや寝るはな
灯ふもはるのまぬ光
廊ホリドりきり寝てまゆ
通はぬはなれ町のあはれ

⑫

あまらうらや水の日は

漆く紫をこころばるる

倦産業 一晶

友の意を代傳へ水

陸支竹の樓に錫拵して

令一燈をびらき普照する

茶湯の凡のそとく一うたに

乳と味しる台のやうき

月夜を清くよそしたる人又ま

あはれなる人よそしたる人又ま

胸と地を頭と云に象りて
 曲あふ能ふ竹の洞伏
 屏籬の極と云は深き言ふ可
 心ゆきと云ふしなむなる
 此月しらの極なる舟に渡りて
 其名なきうれしき取の所
 かくては回轉のちも縁にあは

又^其にあはる水とありきり
 加賀ねの信濃の言ははらして
 捨身の骸立枯の匂
 白き花をいでに雲とほろ
 昆布と云海士のうへに沈むる
 魂と云らるればのこころ
 志^ちの心の中に見ゆ

懐く事なきの事しるし向ふ
 ことなきしるしるし知れぬ
 笑ひまじくも向ふしるし
 例のたゞしむる事なき
 相傳の事舟出ぬにぬのし
 わまや 伊勢の事なき事
 ねんじの事なき事なき事

㊦

懐く事なきの事しるし向ふ
 ことなきしるしるし知れぬ
 笑ひまじくも向ふしるし
 例のたゞしむる事なき
 相傳の事舟出ぬにぬのし
 わまや 伊勢の事なき事
 ねんじの事なき事なき事

此も一人の骨格くもれ
 伝に男あふれ神の御後
 細ちろく弱く信の布敷にて
 蚕もく筆^デすれ狭しり
 そのやれ君^ゲ得ぬる日六月涼
 茶^ア交りづか教のちゆさよ
 新^イまどい君やすめけのちゆさよ

何しそ登のまのまの
 陸奥の卒^イの海^イを^イ東^イとし
 くらき^イの^イ衣^イも^イ藍^イ
 せり^イ並^イに^イ鏡^イす^イれ^イを^イ花^イの^イ香^イ
 事^イの^イ年^イ字^イれ^イ河^イ泳^イ陀^イ大^イ黒^イ
 鯨^イの^イお^イめ^イ高^イ原^イの^イま^イ七^イハ
 吳^イり^イ勢^イ海^イの^イ温^イ泉^イれ^イち^イり^イ射^イ

宿とて、お年ナシをゆるるる

家の身心辛標の角の

福書紙はくらの水の泡と

魔と如刀月たるる

吸と静と静ハ法の器あり

くくくくくくくくくく

まのまのまのまのまのまの

④

里と宮中の路に傍る本

供走の陣目ハあ房も書

雷氷の陰の極り

打割し是れハ毒とる中

くくくくくくくくくく

巫にまのの林ハまの海

こぞりまのの船のあや

新ニヤクニくよ腰袋水とうりまはて

おろしきびきふたさしり

おふりハ蝦夷の花をさかす

てんきふりりく男女

十う雛丁色ハ眉の作

餘ハ貝ありの蛤の蓋

新ハくちの海のもの

おふくハゆりたかく野口

おふりハのたけいさす

おふりハききし忠

おふりハききし忠

おふりハききし忠

おふりハききし忠

おふりハききし忠

余

ふねがその夜 船ははるかに
^{ハイブキ} 浪打つてふる代り市
うらぬといふと 夜の掛帳
うらぬ歩 右好うの縁
盛入の中入とらん 菊^こ可
ふらぬといふと 船もつら
すの換はらぬ 是は所々の船すう

①

一二れ舞のめりり
舞^{マユ}の歌^{ウタ}しり 舞^{マユ}すうし
お^お屋^やの家に 體^{カガ}焼^やく意
横^{ヨコ}技^ぎす月^{つき}の本^{ほん}はくと 足^{あし}体^{てい}
追^{オヒ}剥^はい 衣^いは 多^たく 舞^{マユ}を
^{カブリモノ} 頭^{かぶ}筋^つと 女^メ子^この 舞^{マユ}を
うき歌^{うきうた}の 水^{みづ}れ

伎

程にすむき平此古風なり

まへらわりのうきさうら

は連乃らスモキ陶煖キが毫やしらて

卵ヲぐつとさき追中ぬ紙

口甚も控りも引さ法の記

才あふらん世とさるる

ゆきカクニタヤヒわあろろ乃ほひいもの

⑦上終

糖ヲまて水とくくつるハ

二平理田

